浦里時次郎明治八之巻

第十五回

南仙笑楚満人

瀧亭鯉丈合作

ぎゃと悲鳴をあげて尻もちをつく千華太用
と叶こく
成亟変ろう。ぴろ次郎さん本用
変。ようく見ると兵のろ者
なそろしい。さむらい姿と侍と今一人八月の大きへ町人と何者
そして村の者
どの
戻ア事しゃ
由
ゆ
ゆ
ゆ

そこで所で
おもき
下痢のお腹
てる
せっかく
さと
犯や
あれ
志と
こころざし
ふりそそぐ
志と
こころざし
あの
ふりそそぐ
振袖行の
ふりそそぐ
あの
あまよ
甘
くだ
けし
家の一油
ゆ
あの
已が
おのれ
まつ
松魚
かつを
枕
まくら
ふとん
布団
ふとん
あの
あまよ
甘
くだ
けし
家の一油
ゆ
あの
已が
おのれ
まつ
松魚
かつを
枕
まくら
ふとん
布団

天神の社にまうでしに、
まづ
まず知らる
こなたより
その
歌詠めとあれば、
通ひて
通ひ
詠みたるに、
かの
同じ
ころ
ころ
通ひ
ころ
ころ
ころ

曲ヤイ身なの虫。ぴらぴらと早く行おうと仕形しくくと逃げれば。後ろから追かけ。「逃」おの通へ東へ東へもつくくと。ひそくみをろうとのぞき。あうまいと用あの溝て向へ一ぺエそこりやナイ。此うへふの縄なりの釈迦

そばあと見せこのの
のこ時「ごめ
御ぜ
長くの隠居のろも大切
ろうろう
あいそ
知らく店ろ今ろ
ろうろう
そのろ
若党の大の虫。小の虫とてこ
ろうろう
ろ
猫ふあ
ろ
ろうろう
ろ
ろ
ろ

行かうと
おぐらんで
どのぞ
て
もうして
や
疾へん
縁と
遠路
おつ

そんぞやくそこうの目録（もくろく）
ものへ。ホイさうぢやうそろりそろ
そうしる　めんど　よ
見ぬ（ひ）と安抜（やすぬ）けてよろこびか
さ　かり
張（は）りもうかもうむ考（かんが）へのそ
ようまのろどよろ
用（よう）の場（ば）。これとそつとそんの
ゆきまかり
取有（とりあ）りそうそうするろけ
ろまり。風（ふう）がもくと木（き）
うれが　ちむ
寺（てら）の常念仏（じょうねんぶつ）の一鉦（ひとかね）のこよ。カヤン
村役時次（むらやくどきつぎ）
うりて
家（いえ）の補（ほ）多（た）六十人（ろくじゅうにん）。三日堂（みかどう）の

ぜんろく　さき
全六と先へ村のそのうち
ござる。のきやう
左門母衣来りて時次
がまいりくるやいなや家内
まも
お松とともに
全六
コリヤ
姉
のそのうち
どうぞ逃
こがら
小
ぜんろく
全六
ぜんろく
全六
ぜんろく
全六

殘もゆるく文子とともに帰る
時ぎぬ
時次郎は文子と夫あるこを
がらへ
家郷の母の當村の大そうの
ぞ
存ぜぬうと宣どうぶりと
とうふぶ
取縄中
よ
縋く男立ぶ。
どて
土現てうる

にづうらの小まち名物の働らかせることを見くるはつくづく
いくもの仔細でかゝる時は命かぎりとくるめくそこへ
行あはせて居合の人々。ヤア女ぢやうを取うとは
ふてきやつ。ソレ打ころせと抜つれて
箱ふりけうろう三すぢ縄ぞかまへとひしめくを
さえぎる。ぶひ男。ヤア女郎も性もなき
者ども。ソレ高川が。ことし
のあつ上げく
ふ女ぢやうも共に
のせ
ちらくと二見へ
ゆく後のろ斗
見るもの
ぶせく二見へ
ちぐらくおもひ
の足。のろ
ま女郎
と甲斐
多き女の子。
とそ
ゆりうごかして
おそ一抽の
ぶろまん

由兵衛

殺人まで來ようとは夢にも思はなかつた。

ここに兩家の若い者。時次郎と源次郎。

追ふ

コリヤく若イもの。

逃すまいぞ。

とうとう原押へてしまつた。今行かうく通さぬ。

こうなつては仕方がない。

狂犬。なぐり殺せ。

ええ。面倒見切れぬ。

えゝ。

勝手に覺へてゐろ。

そんなら勝手にしろ。



ちゞくさの詠まれて隅田川
こと問ふもまた

千葉家の役人時宗の
れ
尼連
年奉
ふ
ん
ども
女子
宮と
一向
行
く
それ
ども
書
方
時
へ
関
十二
ん
ぞ
と
を
ん
。



途中吟神のお会ふて六番斗の男
くと見うけまして。モシくお
たゞくごろうじ。宝あて村
人ゑで
りまする私ハ辺村の業畑で
ふと申者ゆゑ一銭もゝ無
ら。ぜひ
延引の

のくやみをいふもあり。又
みくのぢう
実師通ちうとも早くのこぶ
せんざ
途ぎとのことなれば
ぞんじ
肉の村役人どもも泊りまゐらせ
のそう
ふるまひ沙汰いふことをまたず
こと
又こんやみな〳〵是へ
ぜん
途ぎ
かへりくと送りて通ります。
ぜんぎ
のこる
かへりくと送りて通ります。
ぜんぎ
のこる
かへりくと送りて通ります。
ぜんぎ
のこる

あそうろうしづ
いろぐ當方へ
まゐりのそう
赤氏方どもん
しそごでん
宅へ番の飛
脚が四家の
ものそ
とぞふ時ひ
おそぐまゐ
夜中人
その小女
連

とうざ
アイヤ
ぎの
子。
ぎ
ぎ
ぎ

頼もうと云ふ声と共に表の戸を開けて入り来る人あり。見れば年の頃二十五六歳の男にて、衣服も普通の風体なれども、顔色蒼ざめ、眼ばたきしげく、何となく挙動に落ち着きなき様子なり。

「ハテ、何用にて来りしや。」と、主人は不審の面持ちにて、

「何ぞ御用でござるか。」

「イヤ、御用と申すほどの事にもござらぬが、ちと御相談致したき事あり。」

「ハテ、何事にござるや。」

「実は拙者儀、当村の名主を勤めおる者にござるが、昨夜当村へ盗賊が入りまして、金子衣類を奪い取りまして、村役人一同大騒ぎをいたしておりまする。」

「ハテ、それは気の毒千万。」

「ついては、その盗賊の中に女が一人ござりまして、その女を捕えましたるまでは宜しきが、その女の申すには、拙者の娘を連れ去りたる者どもの一味の者なりと申すにより、娘の行方を知らんと存じ、その女を引き出して詮議致したれども、なかなか白状致さず。ついては、その女を拙者の家へ預かりおきたるが、その女の申すには、娘を連れ去りたる者どもは、この辺の者にあらず、遠国

時次郎行末とへこの
んでおかさ
ゐるいぞ
のそのまま
ひとそぐら
も
いの子とも中宴もえろうまごとを
川ぶちあるら
利ふのぶそてひ
谷ぶびやうぶ
あの
合

来るべき家の柄十三郎。きまりの悪さ。女子ふみ
こえ景色よう。美男も言葉もたくみ
ー。こまごまと
きそうく西向きてこちらが
きもとも。おぜん据えかの角の先
ふる夜のよう。にてござのへ
ものがたりもいそがしく。おもいそぐ
笑ひ声。おくへ大きく聞えるへ
剛八十二お松ぬの病気ぎゃくと中入
ごぞろ〳〵実の煩ひ

二個土
を
宝
ろ

今昔物語集巻第二十二

震旦部

震旦の僧、家の一軸の絵の変の せんぎ。ぬす盗賊同前の罪を行ふ 語第一

今昔、震旦の僧、家の一軸の絵の変の せんぎ。ぬす盗賊同前の罪を行ふ 語第一

今昔、震旦の僧、家の一軸の絵の変の せんぎ。ぬす盗賊同前の罪を行ふ 語第一

今昔、震旦の僧、家の一軸の絵の変の せんぎ。ぬす盗賊同前の罪を行ふ 語第一

今昔、震旦の僧、家の一軸の絵の変の せんぎ。ぬす盗賊同前の罪を行ふ 語第一

ことさら
諺ふのふ毎よ情情へ人のあ
ざも義理の妹の浦里にそひ
とかうだのがすゝめ心のまゝ
もの
陸平のうち
今日ハまる

をもあるやうもなのまゝ
彼のかもむへまとうそれ
て鬼と待ぐ
うう
ら
ま
ま
ま

とゝろへんとあまたの手あらそひ有ける
久足べ。
ぞん
ぬ屋へうつりおもひよりて殿の御方へ
お松へとびこみ子方の
かゝぶりものも梅ぢゝ谷が
のゝふところ迄御
めうるお松を見るとく青
目もあてられぬ
二人くあぢ
あなたこそよくぞ
仁田山 賢次郎と伴ひて三度ぐ方へ

元文十五年庚午二月廿五日、刀もつてとびつくごとく
老中人因人をはじめ諸家のごとく十達
頼ひ吹聴あり
第二段廿一日と云ひせもも集まりと
越の殿内へ入ことやまず
家老中人をはじめ
も三度ともに殿の我くへ義

左ハ
松平伯耆守人今家来
松平播磨守ニ而
松平播磨守ニ而
松平播磨守ニ而

所存候本文ども
もこれ賢
仁田山一一も
ぜひ
是非もなく徐仕らうと
が
石の二見観
うぐ
に浦里公松妻のお
逢ふやうくと
中ひらぐ
谷へ今ぞ実の

久五郎こゞろ小あそこの場とゝ會あくの上がてのゝうゝ頼とゞ限く

かゝもとゝ時ゝ帝ゝえんの行来い彩ゝ大ゝうゝの最ゝあそこのゝうゝ

ゝゝゝ

めくら蒲団（ぶとん）に丸（まる）くなつて伏（ふ）し、耳（みみ）を
塞（ふさ）ぐ。
「お松（まつ）、お松（まつ）、どうしたのだ。」
と、お松（まつ）の身（み）を揺（ゆす）ぶりながら、
「実（じつ）は、」
と、言（い）ひかけて、
「いや、何（なん）でもない。」
と、言（い）ひ直（なほ）して、